

心は大空を泳ぐ

小川未明

青空文庫

いまごろ、みんなは、たのしく話をしながら、先生につれられて、知らない道を歩いているだろうと思うと、勇吉は自分から進んで、いきたくない、こんどの遠足にわわらなかつたことが、なんとなく残念なような気がしました。

しかし、家のようすがわかつているので、このうえ、父や母に、心配をかけなくなつたのでした。

「おまえがいきたいなら、お父さんは、なんとでもして、つごうをつけてやるから。」と、父はいいました。けれど、彼は、頭を強く横にふりました。

そのとき、これを見た母は、なんと感じたか、目に涙をためていました。

緑色の大空を、二羽のつばめが、気ままにとびまわっていました。それを見ていた勇吉は、

「ぼく、つばめになりたいなあ。そうしたら、すぐ、みんなのところへ、いけるのになあ。」と、ひとりごとをしました。

たちまち、目に、工場や、製造場のある、にぎやかな町が見え、また船の出たり、入ったりする港がうかんできて、見るもの、聞くもの、すべてこれまで、知らなかつたこと

ばかりでした。ちようど、みんなは、大きな工場を見学して、いま、その門から出たところで、先生の話を聞きながら、港のほうへ、歩いていたのでした。そして、一同のたのしそうな姿が、ありありと、想像されるのでした。

すると、つぎには、紫色の水平線のもり上がる海が見えました。どこか他国から、たくさんの貨物をつんできたのであろうか、汽笛をならして、入ってきた船があります。だんだん、その黒い大きな船が近づく、日の丸の旗が、風にひらひらとひらめいて、目にしみるのでした。

「万歳……。」と、申し合わせたごとく、みんなのさけぶ声が、勇吉の耳に聞こえたのです。しばらく、彼は、うつとりしていました。やがて、想像の夢からさめると、つばめもどこへか飛び去って、いませんでした。じつとして、家にいらなかったのだれか友だちがいらないものかと、学校のそばまで、走っていききました。

べつに、自分の知ったものとも、あいませんでした。ただ、広い運動場に、こいのぼりが立って、高いさおのいただきに、赤と黒の二匹のこいが、生きているように、大空を泳いでいました。彼はしばらく、その下に、たたずんで見上げているうち、自分がその黒い一匹きのこいに、なったような気がしたのです。

若葉^{わかば}のけむるような林^{はやし}を、波^{なみ}だて、ふいてきた風^{かぜ}が、

「さあ、はやく、いっしょにいきましょうよ。」と、黒^{くろ}いほうの大きなこいを、さそうのでした。

「どこへ、つれていつてくれる。」と、こいが聞^ききました。

「君^{きみ}のいきたいところへ、どこへでも、つれていくよ。」と、風^{かぜ}はいいました。

「あの雲^{くも}の上^{うへ}まで、つれていつてくれる。」と、こいは聞^ききました。

「いいとも、雲^{くも}の上^{うへ}にのれば、それは楽^{らく}なものさ。それに、海^{うみ}の上^{うへ}でも、山^{やま}の上^{うへ}でも、世^せ界^{かい}じゅうを見^みてあるくことが、できるもの。」と、風^{かぜ}は、いいました。

「ほんとうかい。はやく、ぼくをつれていつておくれ。」と、こいになった勇吉^{ゆうきち}が、たのみました。

「いま、その綱^{つな}を切^きるからね。」と、風^{かぜ}はさけんで、こいのからだを、はりさけそうに、ふくらまして、力^{ちから}いっぱい、吹^ふいて、吹^ふいて、吹^ふきとばそうとしました。けれど、太^{ふと}い綱^{つな}を切^きることができなかつたのです。そのうち、風^{かぜ}は力^{ちから}がつきてしまい、いつしか、ひっそりとして、二匹^{ひき}のこいも元氣^{げんき}なく、だらりと、さおの先^{さき}にたれさがりました。勇吉^{ゆうきち}は、家^{いえ}を思^{おも}い出^だして、かえつていきました。

真夜中のことでした。ふと耳をすますと、雨風がつのつていました。

「学校のこいのぼりは、どうなつたろう。」と、勇吉は、とび起きました。

「小使いさんが、おろしなさつたでしょう。」と、おかあさんが、いわれたので、勇吉は安心して、また床にはいつて眠りました。

朝になると、太陽はかがやいて、まったく昨夜のあらしをわすれたような、うららかなお天気でした。彼は、顔をあらうと、ねんのため、こいのぼりはどうなつたろうと、いそいで学校までいつてみました。

しかし、小使いさんが、わすれたのか、こいのぼりは一晩じゆう、雨風にさらされたとみえます。そして、半分ぬれながらも、あらしに負けず、元気でした。大きな口をあけ腹いっぱい風をすつて、大空を泳いでいました。

「そうだ、ぼくも、あらしなんかには負けず、元気よくやるぞ！」と、勇吉は、自分と似た黒いこいにむかつて、拍手をおくりました。

大空で、銀色の雲が、下を見て、わらっていました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

※表題は底本では、「心《こころ》は大空《おおぞら》を泳《およ》ぐ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2019年3月29日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

心は大空を泳ぐ

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>